

# 巴蜀印章試論

成家 徹郎

## 巴蜀印章の実相

巴蜀印章はほとんど四川省内で発見されるが、まれに湖北省や陝西省でも発見される。巴蜀印章の特色を一語で言うならば「多種多様」である。それはただ印面の内容が多種多様であるばかりでなく、印面の全形、鈕の形体、材質などにもこの特色が現われている。

## 印面

印面の全形は、円形のものが多いが、方形のものも少なくない。その他、三日月形の変形のようなものなど珍しい例もいくつかある。銅印は円形のものが多い。印面の内容もまた実に多種多様である。漢字とは別系統の文字（巴蜀文字）や符号であるが、まれに漢字が使われた例もある。さらに、器物を描いた図像や、ある儀式の情景を描いたものもある。また材質が多様である点も、秦漢時代の漢字印章と大きく異なる。銅製の他、石質、骨質、陶製のものが発見されている。しかし銅製のものが圧倒的に多い。当然、木質のものも作られたと思われるが、耐久性が無いので朽ちて、今日まで残る例は報告されていない。

## 鈕（ツマミ）の形

鈕の形は、装飾がほとんど無く、紐を通す孔があるだけの非常にシンプルな形式が最も多い。しかし他にさまざまな形体があり、特に動物をかたどったものはなかなか魅力があり見ごたえがある。中国東部地域の戦国時代のいわゆる古璽の鈕は、巴蜀銅印のシンプルな形式をそのまま真似たものである。

東部地域の漢字印章が独自の鈕を発展させるのは漢代に入ってからである。

巴蜀印章が作られた時代はだいたい紀元前の6世紀から3世紀の間であり、これまで発見された総数は私の集計ではおよそ150個である。ところが最近の報道によると雲南省で36個発見されたという。05年8月10日付『中国文物報』によれば、05年の春、雲南省昭通市で戦国時代から前漢時代にかけての墓葬群が発見された。合わせて15座の墓が発掘され400点以上の文物が発見された。その中に巴蜀印章が36個含まれている。(丁長芬2005) ただし図版が掲載されていないのでどういうタイプのものか全く分からない。

巴蜀印章は非常に多種多様であるので、5、6個のみを見て全体を推測することは不可能である。しかしここでは紙数の制約があるので、あまりたくさん紹介することはできない。特に興味を引くような印章をいくつか紹介するにとどめる。

巴蜀印章についてよく紹介している資料を列挙しておくので、関心ある方はそれらによって認識を深めてほしい。<sup>1</sup>

## 巴蜀印章の実例

### ①什邡市城関出土方形銅印<sup>2</sup> (図1)

1992年正月、什邡市(成都の北およそ5、60キロメートル)で発掘された船棺墓葬から銅製の印章が見つかった。この印章は、多種多様の巴蜀印章の中でも、非常に珍しい作りになっており、唯一の例である。まず、大きさは、1辺が3.5センチメートルの正方形で厚さは2ミリメートル、つまり全体は板状のものである。印面は巴蜀文字と図像からなる。ところで奇妙なのは、この印面の反対側(鈕のある側。ここでは“上面”と呼ぶ。)で

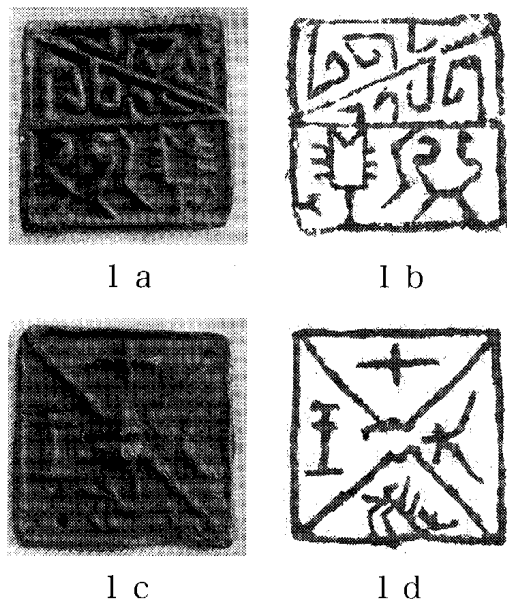


図1 什邡市出土銅印

ある。この中央には他の印章と同じように鈕がついている（破損によって消失した）。そして、この鈕を中心にして4つの二等辺三角形が作られている。これらの三角形の中にはそれぞれ1字が記されている。時代はおよそ紀元前500年と推測されている。

馮広宏、王家佑両氏は、この印章の印面は巴蜀図語（絵文字）で、鈕のある上面は漢字であると考え。つまり1つの印章に、系統の異なる2種の文字が記されている、と考えるのである。これまで四川省で発見された墓葬から、巴蜀印章と漢字印章が一緒に出た例もあるから、2系統の文字が1つの印章に一緒に記されるということは十分ありうる。いわゆるバイリンガルの資料ということになる。さらに、彼らは、印面の巴蜀図語が表す意味と上面の漢字の意味は同じである、と考える。

まず上面の漢字であるが、彼らはこれを「十大老王」と読む。この中の「十大老」は「王」を誉め称える修飾語とする。こう解釈して、今度は印面の巴蜀図語について考察する。印面は中央のヨコ線で上下半分ずつに区切られている。その下半分に描かれているものは礼器で、左が鐸、右が罍である。これら2器の組み合わせの例は他にもある。（図3）印面の上半分は図語ではなく、明らかに巴蜀文字を表している。この種の文字は例えば成都百花潭戦国墓から出土した青銅容器の蓋に記されているもの（図13-2）と同類であり、巴蜀出土の武器（図13-1）などにも見るもので表音文字である。ここでは多少装飾化しているように見える。しかし馮、王二氏は、印面の上部は什邡近辺の地形を描いた略図であると考え。そして上面の漢字「十（什）」に対応し、印面全体が意味するところは漢字の「十大老王」だろうと推測する。

ここで指摘しておきたいことが1点ある。それは印面の構成が、インダス印章とよく似ていることである。インダス印章の印面も一般に、上にインダス文字が横に並び、その下に動物その他さまざまな図像が描かれている。インダス文字の解説に関しては諸説あるけれども、図像は明らかに儀式と密接な関係がある。

### ② 榮経県曾家溝出土銅印<sup>3</sup> (図2)

1981年から翌年にかけて発掘された古墓群の一つ、第16号墓から銅印が発見された。印面には、これまで発見された巴蜀印章には見られない文字(?)が作られている。また陽文になっているのも珍しい。これは棺のほぼ中央の位置で発見された。この墓は1棺1槨で槨の外部に頭箱が付いている。墓坑の大きさは、3.7メートル×2.46メートル。埋葬品は、印章以外は銅器は無く、漆器や陶器の容器などである。

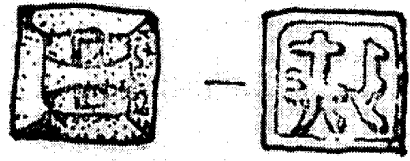
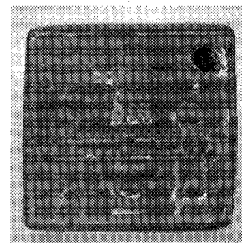


図2 榮経県曾家溝出土銅印

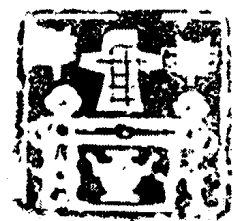
ここで発見された古墓群はみな築造に当たって白膏泥を使用しており、また全体的構造は春秋時代楚墓の特徴を具えている。第16号墓は墓葬様式によって、春秋時代末期から戦国時代にかけての頃に埋葬されたと考えられる。いくつかの遺物に対して炭素14の年代測定を行ったところ、およそ紀元前600年という年代が出ているから、上記の推測と一致している。

### ③ 新都戦国木槨墓から出土した2印<sup>4</sup>

1980年に新都県馬家公社で発掘されたかなり規模の大きい木槨墓から銅印が2個発見された。その一つは、印面の全形が方形のもので、全体は四角錐の構造になっている。(図3) その頂点にヒモを通す鈕(橋形鈕)がついている。印面には、何か祭儀を行っているさまが描かれている。上方の左右には鐸が各一つずつあり、そして中央には人物像があり、そこに巴蜀特有の文様が描かれている。この文様



3 a



3 b



3 c

図3  
新都馬家公社  
出土方形銅印

は三星堆から出土した青銅立人像に見られるものであり、この伝統は連綿と続いてきたことが分かる。また、この文様は巴蜀の青銅武器にもしばしば用



図4 巴蜀武器上の  
図像

いられている。(図4) この銅印の鈕のある面には、商周青銅器の獣面紋に類似する獣面紋が描かれている。これは、蒲江出土の印套の文様とよく似ている<sup>5</sup>。印章の大きさは、辺長が3.5センチで、高さが1.4センチある。

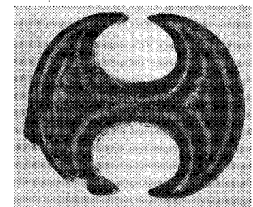
この銅印について呉怡はこう考える<sup>6</sup>。印面に描かれてある情景や器物は王朝の儀礼と密接に関連があり、巫師長が所有していた可能性が強い。

#### 新都銅印2. (図5)

もう一つは、錨を二つ向かい合わせにくっつけたような形状を成している。鈕のある面は、鈕を境にそれぞれ文様が異なっている。大きさは、直径が3センチ、高さが1.5センチある。

この墓には墓道があり、木槨の大きさは東西、南北それぞれ8.3、6.76メートルあった。そして槨の周囲は青色膏泥で塗られてあった。印章は槨内の南側で発見された。ただ、この墓は早くから盗掘に遭っていたので、槨内は大きく攪乱されており、そこは埋葬時に置かれた位置ではなかったと思われる。もとは、やはり棺内の中央あたりにあったと考えられる。

この大型墓葬には槨の下に腰坑も作られてあった。腰坑は幸いに盗掘に遭っていなかったらしく、青銅器などたくさんの遺物が発見された。その中の一つに銘文を持つ青銅鼎があった。銘文は“邵之儉鼎”で、字形は典型的な楚国文字である。文献によれば、楚国には「昭」という有力な氏族がいたから、銘文の“邵”は「昭」という氏族を指すと考えられる。もと楚国の昭氏(邵氏)が使っていた青銅器に違いない。墓制や出土遺物から判断して、



5 a



5 b

図5 新都馬家公社出土  
円形銅印

この墓の埋葬年代は紀元前5世紀ころと思われる。

#### ④成都市大邑県五龍出土石製印章<sup>7</sup> (図6)

成都市大邑県五龍公社で1982年から翌年にかけて、巴蜀時期の墓が4つ発掘された。そしてその1つ第4号墓から石印が発見された。青黒色で、印面全体は楕円形になっている。その長径と短径はそれぞれ2.1センチ、1.5センチ、高さは1.8センチある。巴蜀印章の中で石質のものは非常に珍しい。またその印面に刻された符号も、巴蜀印章の

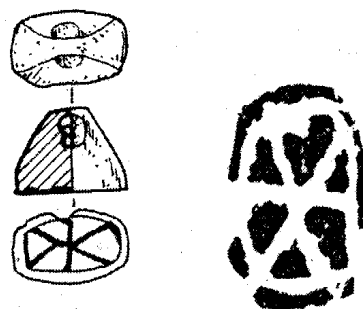


図6 成都市大邑県五龍公社出土石製印章

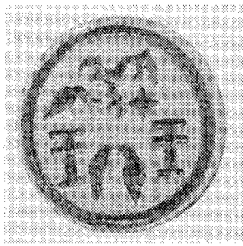
中でめったに見ないもので、これは特殊な例と言える。私は、実用のために作られた巴蜀印章であると考え。巴蜀印章のまれな例である。

印章が出土した第4号墓は船棺葬で、1つの坑の中に三つの船棺が合葬されていた。各船棺の周囲には白膏泥が充填されてあった。印章は、一番規模が小さい第3号棺から発見された。この棺の規模は3.2×0.5メートルで、石印の他は、陶器残片が発見されただけである。年代については、墓葬の形式等から戦国時代初期と考えられている。私は、紀元前6世紀より遅くはないと考える。

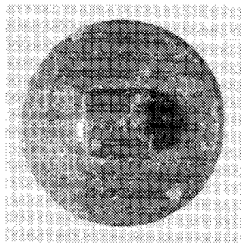
#### ⑤円形銅印<sup>8</sup> (図7)

重慶市博物館蔵 (考古学的発掘によって発見されたものではない。)

この印面に見える符号や図像は、みな巴蜀印章によく現われるものである。また印章全体の形状や鈕の形なども、巴蜀印章の一つの典型と言ってよく、この手の印章はたくさん発見されている。ここで一つ面白い現象が見える。印面の左右に漢字の「王」のように見える字がある。私は、これはやはり「王」字で、巴蜀民族はその意味もよく理解していたと思う。巴蜀民族は日常、彼ら独自の文字を使用していた。ただ、漢字を使用する民族ともふだん交流があったので、漢語を多少話す人もいたし、日常生活の中でも漢語や漢字が多



7 a



7 c



7 b

図7 巴蜀円形銅印

(印面の文字符号および紐、いずれも巴蜀銅印の一つの典型)

少使われていた。そして彼らは漢字の「王」の意味や字形が気に入った。そこで印章や青銅器銘文の中で好んで用いた。「王」字の横画三本のうち中間の一本は、真中にはない。横画二本の間隔が広い部分と狭い部分ができるが、狭い方を上にして見る。だから「王」字は、巴蜀文字を見る際に上下を判別するための便利なマークの役割を果たす。巴蜀文字はまだ解読されていないけれども、「王」字の例

を考慮すると、それらはやはりみな吉語の類を意味するものと思われる。直径3.4センチ、高さは0.9センチである。

⑥成都市商業街船棺葬出土方形銅印<sup>9</sup> (図8、9)

2000年からその翌年にかけて成都市で発掘された大型船棺墓葬から印章が3個発見された。四川省で船棺葬はよく発見されるが、この船棺墓葬は特別大規模である。縦横30メートルに20メートルという巨大な墓坑に30体以上の船棺あるいは独木棺（船棺のつもりだろう）が埋葬されてあった。ただ、近くに高層アパートが建っているため、未発掘の部分がある。銅印は1号棺から2個、12号棺から1個発見された。ここでは1号棺の2個を紹介する。銅印a (M1-31、図8) は、印面は正方形で、橋形紐がついている。大きさは辺長が4.5センチで高さ0.9センチである。12号棺から発見された銅印もほとんどこれと同じものである。銅印b (M1-36、図9) は、印面はやはり正方形であるが、紐の方は鳥をかた

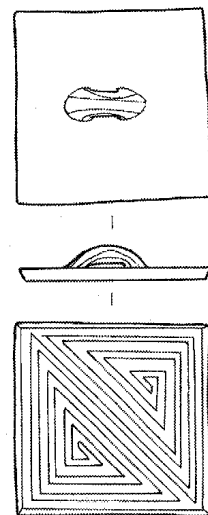


図8 成都市商業街船棺出土方形銅印(M1-31)

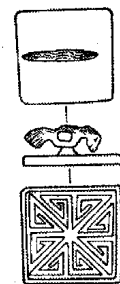


図9 成都市商業街船棺出土方形銅印(M1-36)

どった造形である。大きさは辺長が2.3センチで、高さは0.9センチである。ところで、私が驚いたのは、印面の造形である。これらの印面はみな純粹の幾何学文様である。これまで知られていた巴蜀印章の中にこういう例はまったく無かった。従来知られていたものとまったく異なるタイプの印章が発見されたことで、巴蜀印章の「多種多様」という特色がますます顕著になった。今後も、予想外の印章が発見される可能性が大きい。この墓葬は戦国時代の早期に属すると考えられる。上で紹介した新都馬家公社の戦国墓より古いと思われる。およそ紀元前600年あたりを想定してよいだろう。この墓葬から出土した青銅武器には、図像文字がほとんど見られないので、この時期、図像文字はまだ普及していなかったようだ。この墓葬はすでに盗掘に遭っていたので、印章を含む相当多数の文物が骨董商などを通じて広く世界に流れたはずである。ただ、この種の印章は、印面が漢字でもなければ動物とか器物を描いた図像でもない。もし盗掘で世に現れても、中国人はまったく興味を示すことはなかったに違いない。よって骨董商が買い入れることもなく、書齋や倉庫の隅にうち捨てられるか、あるいは世間から消滅した可能性もある。巴蜀印章には、中国人の伝統的価値観では軽視されるタイプのものが多いので、盗掘で世に出ても、陽の目を見ることなく消えた例が少なくないと考えられる。これは、視点を変えると、巴蜀印章の「にせもの」が世に現われた可能性は非常に小さいと言うこともできる。

#### ⑦日本所蔵の巴蜀印章<sup>10</sup> (図10)

和泉市久保惣記念美術館蔵巴蜀印章 (園田湖城旧蔵)

園田湖城 (1886-1968) がかつて所蔵していた銅印で、1991年に大阪市立美術館で開催された特別展「一金の輝きと精緻の技—中国戦国時代の美術」で展示されたことがある。現在は大阪府和泉市立「和泉市久保惣記念美術館」の所蔵になっている。園田湖城は、京都に生まれた篆刻家でありまた古印の収集にも精力を注いだ。かつて藤井有鄰館 (京都) の顧問をつとめその古印収集に大いに貢献した。園田湖城が逝去した年の翌年に門人・加藤慈雨楼



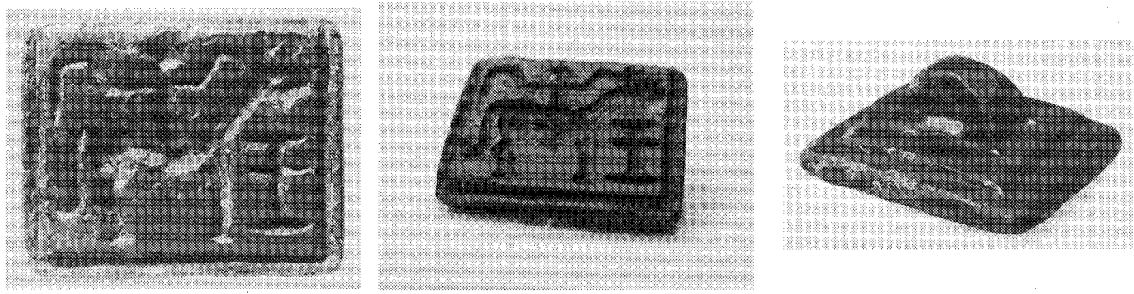


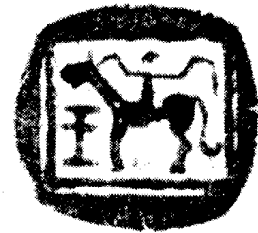
図10 日本所蔵の巴蜀銅印（和泉市久保惣記念美術館蔵）

は、師が所蔵していた古印の中から数百点を精選して印譜を作成した（『平盒蔵古璽印選』）。加藤氏はその中で、印章を粘土に押し付けたもの（封泥）の拓本も一緒に掲載した。（図10b）その労力もたいしたものだと思うが、それよりも、古代（戦国秦漢期）における印章の使用法をよく認識して、封泥を重視した姿勢を私は賞賛したい。最近の印譜や展覧会などでこの種の仕事を見ることは非常に少ないと思う。この銅印の大きさは、1.6×2.0センチ、高さ0.8センチ、重さは9.8グラムである。



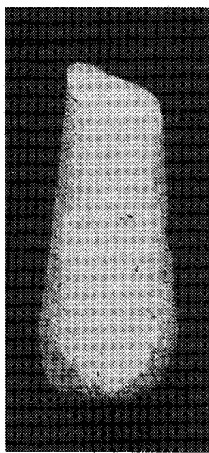
10  
b

加藤慈雨楼『平盒蔵古璽印選』



近年発見された巴族の陶印 —中国最古の実用印章—<sup>11</sup>（図11、12）

殷墟から発見されたと伝えられる銅印がある。戦前に3個発見されたが、うち2個は台北故宮博物院に所蔵されている。あと1個は所在不明と思われる。これらは、考古学的発掘によって発見されたものではないので、その真偽について早くから議論されている。これらの銅印について私は別稿「伝殷墟出土銅印の真偽問題」<sup>12</sup>の中で詳しく述べたので、ここでは要点を記すにとどめる。これら3印はみな商代晩期に安陽殷墟で作られたものである。ただし印章として作られたのではなかった。インダス印章（あるいはアナトリア印章）をたまたま入手した商王朝が、それを真似て作ってみたものである。商王朝は印章を必要とする社会ではなかった。ただ、珍しいものとして、ア



11 a

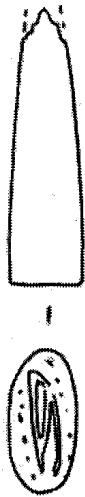


11 b

図11 巴族陶印  
(中国最古の実用印章 T 9)



12 a



12 b

図12 巴族陶印  
(中国最古の実用印章 T 10)

クセサリーあるいは玩具の類として作ったにすぎない。だから形体は確かに印章であるが、印章として使われたことはなかったし、そのように認識されてもいなかった。

中国大陸で最初に印章を作り使用した民族は巴族であった。巴族陶印が発見された場所は、湖北省長陽県から西に97キロメートルいったところにある香炉石遺跡である。この遺跡は1988年からその翌年にかけて発掘された。堆積していた文化層は相当厚く、およそ紀元前2000年から紀元前500年くらいまで連続していたようだ。陶印が発見されたのはその第4層で、およそ紀元前1000年ころに属すると考えられている。印章は2個発見された。その一つ (T 9。図11) は、印面がほぼ円形のもので、直径が1.9センチメートル、上端は破損していて、現存の高さが4.5センチメートルある。もう一つ (T 10。図12) は印面が楕円形でその長径は2.1センチメートル、短径は

1.2センチメートルあり、これも上端が破損しており、現存部分は5センチメートルある。これら2印に記されているものは、明らかに漢字ではない。おそらく巴族文字または記号の類であろう。もちろんその意味するところは分からない。ただ、これらはどうみても、お守りやアクセサリー等とは考えられない。やはり交易に使った実用の印章と考えるべきである。巴族は商業民族だったから、交易活動の中で必要が生じたので作ったのである。交易活動の中では、粘土などに押しつけて「しるし」を付ければそれで済むから、印面は符号でも絵でも何でもよかった。「しるし」を付けるのが目的であるから、その材質が金とか青銅である必要はまっ

たかない。

## 巴蜀の文字

巴蜀では二種類の文字が使われていた。

### a. 銘文用の文字<sup>13</sup>

図像と符号から成る文字。言語の表記ではなく、吉祥や勝利祈願などの意味を表わす。

### b. 日常の文字 — 表音文字（言語表記）<sup>14</sup>（図13）

ペルシャ帝国とその周辺で広く公用語として使われていたところのアラム語<sup>15</sup>の文字を取りいれて、彼らの言語を表記するための文字を作った。古代インドのブラフミー文字<sup>16</sup>もやはりアラム文字の影響を受けて作られた<sup>17</sup>。また、アラム語で書かれたアショカ王法勅もある<sup>18</sup>。

巴蜀の文字について考える場合は当然ながらその言語も併せて考えなければならない。しかし古代民族の言語や文字を考えるのは一般にはそんなに容易なことではない。言語はもちろんだが、文字も一般には耐久性のない材質に書かれたから後世に残らない。中国の場合で言えば、甲骨文や青銅器銘文はたまたま耐久性の強い材質だったに過ぎない。商王朝の鄭州時代にはすでに

漢字が完成していたはずであるが、今日まで伝わるものは発見されていない。

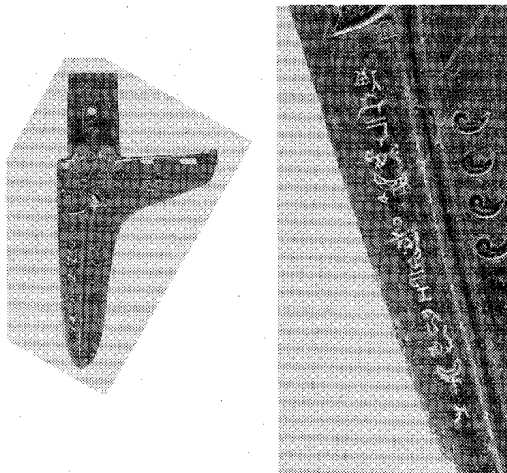


図13-1 巴蜀表音文字(青銅武器銘文)

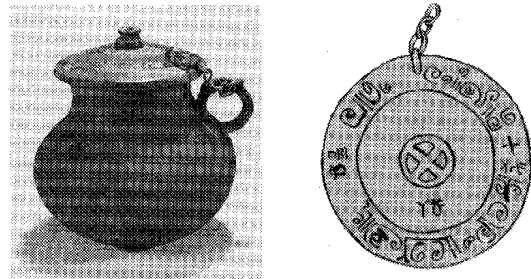


図13-2 巴蜀表音文字(青銅容器蓋銘文)

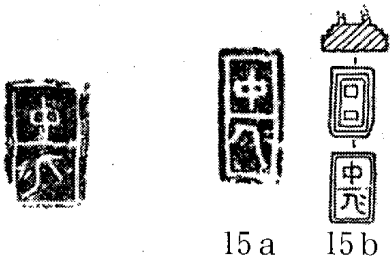


図14  
冬筍壩出土漢字  
印章 (M50-14)

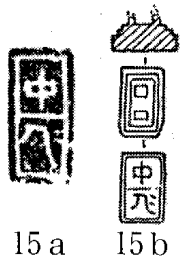


図15  
冬筍壩出土漢字  
印章 (M50-15)

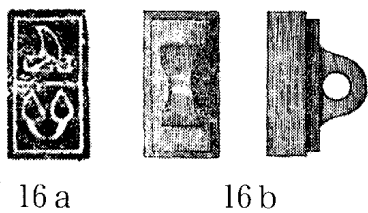


図16. 冬筍壩出土銅印(M50-39)

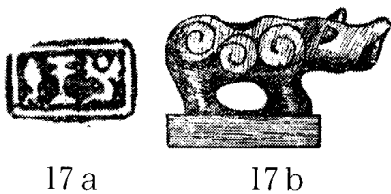


図17 冬筍壩出土銅印(M50-17)

紀元前600年ごろから出現したと思われる兵器上の銘文は、漢字とは違う系統の文字体系であることは間違いない。この点は李学勤の研究が信頼できる。彼はこう考える<sup>19</sup>。

巴県冬筍壩50号墓から印章が6個出土した。うち1個は破損している。さらに1個は動物の図像だからこれも除外して、4個について考える。この内2個は漢字のもので、ほぼ同じ構成でタテ並びの“中(忠)人(仁)”になっている(図14、15)。ところが巴蜀文字の印章もこれとまったく同じ構成で2文字が上下に並んでいる(図16)。もう一つの巴蜀印章は、印面全体がヨコ長で横に3文字が並ぶ構成になっている(図17)。この種の構成は漢字の印章には滅多に見られない。いずれにしろ、これらの印章

は漢字のものとまったく同じ機能を持っていたことは間違いない。

李学勤はまた巴蜀武器によく見られる図像文字に対して次のように考察した<sup>20</sup>。

この種の符号に対して研究者の見解はさまざまであるが、私(李学勤)は、これらは文字であると考え。私は以前発表した論文の中で、巴蜀文字をそれぞれの形体に基づいて甲類と乙類、2つに分類した。甲類は、絵の要素が強い。おそらく意味を表す図形と音を表す音符から成り立っているのだろう。一方、乙類は間違いなく表音文字で、漢字と似た性格のものだろうが、明らかに漢字とは別の系統の文字である。

ところで今、『商周青銅兵器』で紹介されている巴蜀の青銅製武器「矛」に記されている銘文について考えてみる。(図18) この矛の銘文は甲類に属す

るもので、これまで発見された巴蜀青銅武器の中で文字数が最も多い。文字は矛の両面に記されている。ここで仮に、文字の多い面を正面として話しを進める。ここに見える文字はみな、絵文字的性格が強い。正面は全部で11個の図形、裏面は8個の図形が描かれている。それらの1つ1つの図形はみな、他の青銅武器などでもよく見るおなじみのものである。この矛の銘文を他のたくさんの銘文と対照させて考えると、巴蜀文字の性格について以下の点が明らかになる。

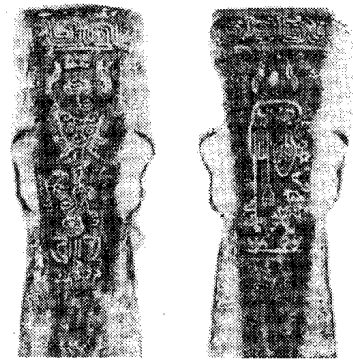
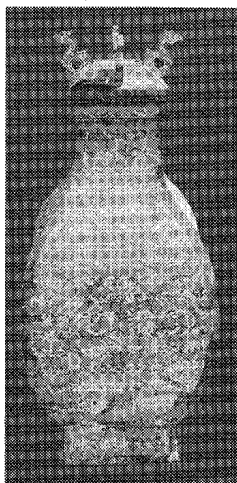


図18 巴蜀武器の図像文字  
(字数最多の銘文)

まず、個々の図形の方向が必ずしも一定しているわけではない。同一のものでタテになるときもあるしヨコになるときもある。ただし、図形の配列は無原則なのではない。どの図形とどの図形が一緒になるかについては、原則がある。

この矛にはたくさんの図形が記されている。おそらく、この中のいくつかは単体でそれぞれが文字の機能を持っているに違いない。また数個の図形を組み合わせると、文字の機能を持つものもあるだろう。そうすると、銘文全体でまとまった何かを言っている、ということになる。こういう機能がなくて、矛のこの位置にこれだけの図形を書くということは考えられない。(装飾のためではない)



19a



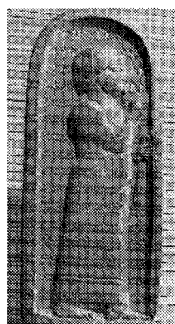
19b

図19 巴蜀青銅器と  
亞字形銘文

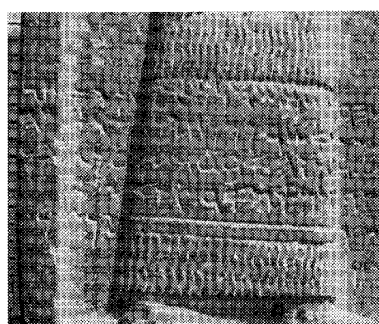
これに関連して最後につけ加えたいことが一つある。成都の近くで発見された青銅器「幾何雲紋方壺」は戦国時代後期のものである。この圈足部分に巴蜀文字が記されている。(図19) ところで注目すべき点は、殷商王朝に独自のいわゆる「亞」字形が巴蜀文字と組合わさって書かれている事実である。そして「亞」字形の扱い方も、殷墟青銅

器のものと何ら異なるところがない。殷墟の青銅器銘文では、「亜」字形と文字の組み合わせの例は非常にたくさんある。蜀の人は、殷墟青銅器の銘文をよく理解していたのである。この例も、巴蜀文字は間違いなく文字であることを証明する強力な証拠といえるだろう。

戦国時代の巴蜀は相当発達した社会だった。それは大量に出土している青銅器や漆器によって証明されている。そして四川省で作られた工業製品がしばしば中国東部で発見される。つまり戦国各国に輸出していたのである。従ってそれらの製品には、輸出の相手国の方で理解できるように、銘文は漢字で記されている。この状況は現代の国際貿易とよく似ている。ところで、もし巴蜀の人々が以前から独自の文字を持っていなかったとしたならば、漢字を受け入れてこれを一般に使用したに違いない。しかし彼らは、漢字を取り入れて自分たちの文字として使用することはなかった。世界に民族の数は非常に多いけれども、文字を作った民族は少ない。社会がある程度まで発達して、



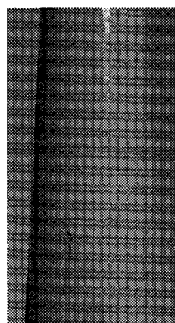
20 a



20 b 石像足部

図20 シリア出土アラム文字

それでもまだ文字を持っていない民族は、近隣民族の文字を借りて使用する例はよくある。古代日本はこの例であり、チベットも同様である。だから、巴蜀の人々はかなり以前から独自の文字を持っていたと考えてよい。



21 a



21 b 銘文拓本

図21 ブラフミー文字  
(トープラー Topra 石柱法勅)

巴蜀の図像文字はもっぱら青銅器に書くためだけに用いられた。銘文専用の文字である。この点はエジプトのヒエログリフとよく似ている。日常、ヒエログリフを書いて意

思を伝達することはほとんど不可能である。そこで書写に便利なデモティックが出現した。デモティックは、言語を表記するための文字で、日常はこちらを使った。巴蜀の場合、図像文字は彼らが独自に創案した文字で、およそ紀元前600年にはすでに使われていた。一方、表音文字は、アラム文字（図20）の影響を受けて紀元前5世紀ころに生まれた。インドのブラフミー文字（図21）もだいたい同じ時期にアラム文字の影響を受けて生まれた。

## 巴蜀印章の用途

### 巴蜀印章は官印でなかった

巴蜀印章は基本的に官印ではなく「お守り」のようなものだった。また儀式と関連するものもあり、この例はインダス印章と共通点がある。

巴族はその前期において青銅器を発達させるような社会背景をもたなかったが、遅くとも春秋時代には国家を形成した。中原の戦国時代初期に相当する時代、巴族は楚族に圧倒されて四川省東部に移っていた。楚族はかなり早くから黄河流域の文字—漢字を採り入れた。（遅くとも紀元前1000年）ところがその楚族と頻繁に交流していた（戦争も文化交流の一形態である）巴族は彼らの文字を採り入れることはなかった。それは、巴族はすでに文字を持っていたからである。戦国時代後半になると中国東部は全体的に、印章を必要とする社会になっていた。しかしその用途を考えると、主に国家権力から与えられるところのいわゆる官印が多かったようだ。巴蜀文字はまだ解読されていないので、印章の用途ははっきりしないが、官印ではなかったと私は考える。印面に見える図柄は、符号の類の組み合わせと、儀式に関する図像が描かれたものと二つに大別できるだろう。儀式の中で使われた可能性がある。

以前述べたように巴族は、生存に欠かせない塩を中国の多くの民族に供給した<sup>21</sup>。巴族の起源はもと湖北省西部にある。そしてしだいに勢力を広げて四川省にも進出した。そしてその塩を独占的に供給したため大いに繁栄したのである。

西アジアや南アジア（インド、パキスタン）では、印章は相当早くから商

業活動の中で使われていた。中国で最も古い印章は湖北省香炉石遺址で発見された2個の陶印である。巴族は紀元前二千年紀の時代、中国大陸東部地域で交易活動を行った。これらの陶印は巴族が交易活動の中で使ったものである。中国大陸ではこの陶印の後、しばらく印章は使用されなかった。巴族がしだいに楚族に押されて三峡の西に移り、商業活動が廃れたためである。しばらく空白を置いて、およそ紀元前600年ころに四川省で印章が作られた。ところでいわゆる巴蜀印章の用途は何であろうか？ 何元燊は、これらもやはり商業活動の中で使用した、と考える<sup>22</sup>。彼は、巴蜀印章は『周礼』に見える璽節のような働きをしたと言う。璽節は、商業活動を行う際の身分証明証および営業許可証の役目を果たす。そして璽節に、扱う商品の名称を記すかまたは、その絵を描く。ところが扱う商品の種類が増えてくると、璽節上には書ききれなくなる。そこで新しい方法を考え出した。それは、簡牘と印章を併用する方法である。簡牘上に商品名を書き、役所がそこに、営業を許可するしるしとして印章を押したのである。彼の考え方によれば、巴蜀印章はすなわち官印で、商業活動を許可するしるしであった。

何元燊のこの考え方に私は賛成できない。官印なら、それは個人の所有物ではないから、個人の墓と一緒に埋葬されるはずはない。その役職を退くか死去した場合は当然役所に返却しなくてはならない。また、巴蜀印章はしばしば1つの墓から複数個発見される。官印なら一人1個のはずである。馬王堆漢墓では、官印は冥器であった。

巴蜀印章の封泥は発見されていない。私は、巴蜀印章は実用のものでなく、「お守り」「魔よけ」やアクセサリーのようなものとして好まれたと考える。紀元前6世紀以降の巴族はすでに商業民族ではなくなっていた。だから、商業活動の中で使われたと考えることはできない。お守りあるいはアクセサリーと考えるなら、1つの墓から複数個発見されるのも不思議でない。印面の図像文字は、おそらく吉祥とか幸運を意味しているに違いない。いつも巴蜀印章と一緒に発見される巴蜀武器の上にもやはり図像文字が見える。両者の図像文字はだいたい共通しているが、目立つ違いが一つだけある。それは、



武器上によく見られる虎紋が、印章にはまったく現われないことである。武器上の図像文字は、戦いで勝利を祈願する気持ちを表わしている。だから、もっとも勇猛な野獣として怖れられている虎を武器上に描いて、勝利を願ったのである。しかし日常のお守りは、その必要がないから、虎を描くことはなかった。むしろ儀式に使う壘とか鐸を描いたのである。巴蜀民族は各種印章を身につけて、「魔よけ」や「福を呼ぶ」効能を願ったのである。ただ、新都出土の、印面に儀式の様子が描かれた銅印を見ると、儀式の中で使われた可能性もある。

### 西アジアの印章

世界的に見て、最も早く印章が発達した地域はメソポタミアである。この地域で使われた印章の初期のものはスタンプ式で、最古の例は紀元前七千年近くまでさかのぼるらしい。そして紀元前六、五千年ころの初期農耕時代にはかなり普及し始める。この時期のスタンプ印章は印面および印章全体の形はまだ一定していない。つまみ（鈕）の形はさまざまだが、一般にはヒモを通すために穴を開けているものが多い。印面全体の形は、円形、方形、楕円形などの他、幾何学的でない形のものもあり、実に多様である。印面に描かれる図柄はほとんど格子である。また材質は石製のものが多いけれども、焼成粘土のものもあるという。少し時代を経ると、印面の図柄は、その全面が格子になっているものの他、鹿あるいは“怪人”などが描かれたものがある<sup>23</sup>。

ところが、紀元前三千年ころから、形体がスタンプ印章と大きく異なる円筒印章が出現し、急速に普及し、まもなくスタンプ式はほとんど使われなくなった。この地域では、日常の文字は粘土版に記される。そして粘土版の大きさは必要に応じて自由に調節できる。そこで印章の印面を広く使って絵や文字をたくさん書き込みたい、という要求が生じた。この要求にこたえる最も便利な方法が円筒印章であった<sup>24</sup>。

## 古代アナトリアのスタンプ式印章

西アジアの中でアナトリア（トルコ）では、例外的にスタンプ式印章がたくさん使用されていた。中近東文化センター（三鷹）が20年にわたって発掘しているカマン・カレホユック<sup>25</sup>ではスタンプ式印章および封泥がたくさん発見されている（千を越える数量らしい）。ただこれらについて詳しい報告が公表されていないのが非常に残念である。アナトリア印章はインダス印章と異なり、印面に描かれる内容ばかりでなく、形状や材質も非常に多種多様である。こういう点は巴蜀印章と似た傾向と言える。ここで巴蜀印章と類似性が強いものを2点紹介しておく。

### 1. ライオン形把手付きスタンプ式印章（象牙）<sup>26</sup>（図22）

印章本体の円形の直径は2.35センチ、高さ2.1センチ。大村正子は、製作年代を紀元前7世紀前半と見る。巴蜀印章の中にも、四足動物の直立した姿勢全体が鈕になっている例がある（世界的に類例は非常に少ない）前に挙げた図17以外に2例が知られている。（図23、24）

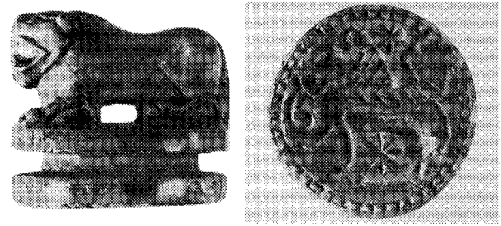
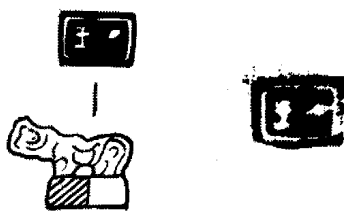


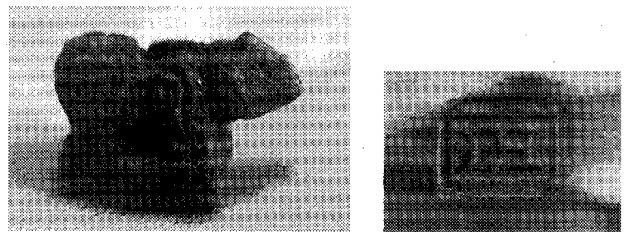
図22 西アジアのライオン紐スタンプ式印章（象牙）  
カマンカレホユック（トルコ）出土



23 a

23 b

図23 榮経同心村出土四足獣鈕銅印



24 a

24 b 印面

図24. 什邡市出土四足獣鈕銅印

### 2. 石製円形印章<sup>27</sup>（図25）

時代はおおよそ紀元前1500年に属する。印面に描かれてあるものは、器物の形象か、あるいは符号？ メソポタミアと言えは粘土版と楔形文字が有名で

ある。とにかく粘土に何かを押しつけて記録する方法が相当早くから普及していた。こういう状況は他の地域ではほとんど見られないと思う。だから、粘土に何かを押しつけて「しるし」を付ける方法つまり印章の起源はメソポタミアにあると考えてよい。この地域は早くから経済活動が活発であり、印章の発明はこれと密接な関係がある。

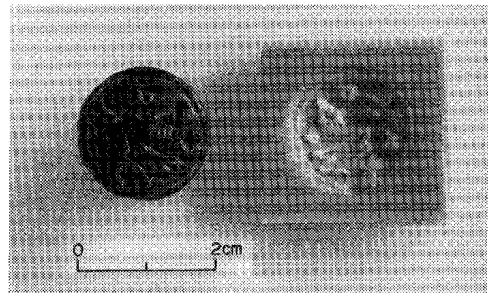


図25 カマン・カレホユック（トルコ）出土円形印章（石製）

### インダス印章

インダス文明と言えばハラッパとモエンジョダロが有名であるが、近年の考古学的発掘によって、この文明の広がりが見えてきた。私はこの地域の考古学を研究しているわけではないので、最も妥当と思われる見解をそのまま紹介する<sup>28</sup>。  
“発見以降70年が過ぎて、今日、インダス文明の及んだ版図と年代については、以下のことが分かっている。

まず版図であるが、インダス文明の遺跡はインダス流域にとどまらず、東西1200キロメートル、南北1500キロメートルという北西インドの広大な範囲に分布していることが明らかになっている。

発見された遺跡の大半は中小の村落遺跡であるが、そのうち6遺跡が都市遺跡である。都市遺跡は、1930年代までは、モエンジョダロ、ハラッパーに加えてチャヌフダロが確認されていたのであるが、50年代以降インド側での調査が進展したことにより、カーリーバンガン、ロータル、スールコートダーといった地方都市遺跡が新たに発見され、調査されている。

次に年代であるが、およそ紀元前2350～1800年というのが、この文明に与えられた存続年代である。これは二つの根拠による。第一は、放射性炭素による年代測定がほぼこの範囲に集中することである。第二に、インダス文明はメソポタミア諸都市と活発な交易を行ったことが知られているが、メソポ

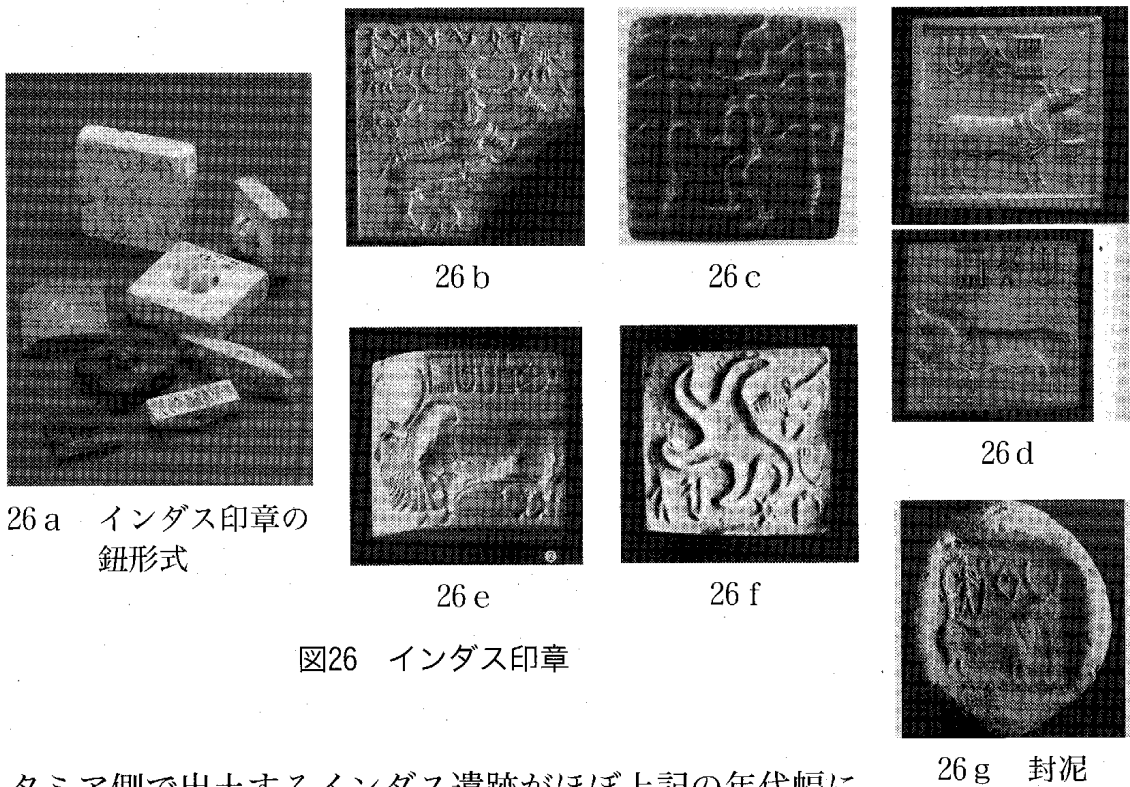


図26 インダス印章

タミア側で出土するインダス遺跡がほぼ上記の年代幅に分布する、という理由からである。”

インダス印章がメソポタミアの影響を受けて出現したのは間違いないと思うが、同時期のメソポタミアのものと違って、こちらは基本的には皆スタンプ式である。(図26) その材質は凍石 (steatite) で、印章全体の形体はそれほど画一的ではなく多様性がある。「つまみ」の形は単純なものがほとんどである。印面は正方形のものが多く、一辺は大体数センチメートル程度である。そしてそこには、人や牛などの動物と共に文字も記されている。みな陰刻である。これまで発見されたものの数量はおよそ2000個に達するという。この文字が解読されればその用途がはっきりするのだが、このインダス文字にまだ定説といえるものはないようだ<sup>29</sup>。

印面に陰刻される内容は、文字と画像が共存するものが多い。その他、単純な幾何学的図形だけのものも見つかっている。文字と共存する図像には、動物が多い。最も頻繁に現れるものは、一角獣と思われる牡牛に似た動物である(図26 d)。この一角獣は想像上の動物で、クテシアス〔紀元前4世紀初頭の人〕やアリストテレスは、インドにおいて考え出された動物だという。

この動物の前には、奇妙な物体が置かれている。これが何なのかよく分からないが、以前は「旗じるし」standardと呼ばれたことがある。また、聖なる「まぐさ桶」と言う人もいる。あるいは香料入れを描いた可能性もある。この他、インドの野牛、コブ牛（あるいはゼブ牛。図26e）や虎を描いたものもある。またシヴァ神の原型と考えられている神像が描かれているものは特に注目される（図26b）。インダス印章のこういう図柄を見ると、インダス住民にとって印章は決して実用だけが目的だったとは思えない。

そこで『インダス文明—インド文化の源流をなすもの—』はインダス印章の意味について次のように推測する<sup>30</sup>。

“動物を単独で表現したものが圧倒的多数を占めるが、祭儀場面を示したものもあり、そのほかにも樹木と神像、あるいは動物と神像などを一つの図柄の中に組み合わせたものもある。また、神像だけ、樹木だけといったものもあり、さらに、菩提樹を中心に羚羊の首を3つ表したのものや、複合動物、あるいは頭を3つ持った動物など奇妙な図柄も見られる。印章の形は必ずしも正方形であるとはかぎらず、長方形や円筒形のものも知られている。このようにみえてくると、印章は動植物を中心とした儀礼にかかわるものであったかもしれないし、単なる封泥ではなく呪術的な意味をもった封印であったのかもしれない。”

インダス印章にはたしかに、儀式に関わると考えられる画像が多い。だから、実用的封泥に使用するためだけに存在したとは思えない。この点では、すでに見た巴蜀印章に共通するところがあるように思われる。

インダス河流域からインダス文明に属する銅印は発見されていないようだ。しかしこの周辺地域からはかなり見つかっている。ヒンドウクシュ山脈からカラクム砂漠に到る間のオアシス地帯は古代トルクメニア文化が栄えたところである。ここからは独自の文様をもつ銅印がたくさん発見された。同様のものはアフガニスタン南部のムンディガクやイランからも出土している<sup>31</sup>。

またパキスタンの南西、イランの国境に近いシャヒ・トゥンプからも銅製のスタンプ式印章が出土したという<sup>32</sup>。トルコのカマンカレホユックからも銅

印が出土している<sup>33</sup>。

インダス印章（あるいはアナトリア印章）の伝達経路

チベット遊牧民が媒介の役割を果たした。

現代中国の考古学や歴史の研究者は、中国古代文化はみな今の中国の国境内で発生したと考えている。外来文化の影響を強く否定している。そしてこういう中国人研究者の影響を受けている日本人研究者が少なくないように見える。第二次大戦後、中国（特に中華人民共和国）では、民族主義や愛国主義の高揚にともなって、文化起源の多元論が定着しつつある。つまり西アジアやインドとよく似た文化があっても、偶然似ているのであって、起源はみな中国にあると考えるのである。紀元前の1000年や500年の時代を考えるのに、現在の中華人民共和国の国境を設定してどういう意味があるのだろうか。古代においても人と物は広い範囲で移動していた。だから一国だけが文化的に周囲と絶縁して単独で孤立して発展するということとはありえない。島国の日本ですら外来文化が非常に多くて、古代日本が独自に発展させた文化を見つけ出すのは容易でない。陸続きの中国なら一層多くの文化交流が行なわれたと考えなくてはならない。従来、中国とその周辺の文化の関係を考える場合、東側や北側だけに目が向けられてきた。もっとも近年になって「南方シルクロード」や「海上セラミック・ロード」が注目されてきた。ただ中国西部地域（チベット高原）およびさらにその西側は、文化交流の経路として注目されることはなかった。その最大の理由は、自然条件がきびしいチベット高原の存在や、漢民族が軽視するところのチベット民族の存在であろう。しかし20世紀に入ってから、特に戦後の考古学的発掘によって発見された文物によって、チベット高原が東西文化の交流にとって重要な経路であったことが明らかになった。そのことを示す顕著な例は「柄付き銅鏡」であり、初期仏像である。きびしい気候や地形は決して人と物の移動を阻止することはなかった。かつて中国各地に作られた栈道は、大自然の地形が移動を阻止することができなかった事実を証明する遺跡である。ほとんど垂直に立つ断崖に

水平に木材を差し込んで、その上に板を敷いて道を作ったのである。その工事の段階でも相当の犠牲者が出たに違いない。またその栈道を重い荷物を背負って歩くにも危険が小さくなかった。うっかり足を滑らせたら、間違いなく生命を失う。現代人から見ると、どうしてそんな大きな危険をおかすことまでして移動（あるいは運搬）したのか、不思議でしようがない。大自然の気候や地形は人と物の移動を阻止することはなかった。移動の制限や阻止が行なわれるようになったのは近世以降、国家が発展して国境がきびしく管理されるようになってからである。移動を阻む大きな要因は、大自然の厳しさではなく、人為的規制である。

古代インドや西アジアに起源がある文化がチベット高原を経て四川省や中国東部地域にたくさん入ってきた<sup>34</sup>。多傑才旦は、チベット高原が文化交流に果たした大きな役割を指摘した<sup>35</sup>。ただ、中国人は、西方にも中国のものと似たものがあったとしても「偶然の一致」にすぎないと主張する。そこでここではまず、中国人でもみな西方起源を認めざるを得ないところの柄付き銅鏡と初期仏像を例にとり上げて、これらがチベット高原を経由して中国に入った事実を明らかにしよう。近い将来私は、「古代中国に入った西方文化」をテーマとする小文を書く予定である。

### 1. 柄付き銅鏡（図27）と最古の中国式銅鏡（青海省貴南県出土）（図28）

従来、「飾板」として報告されていた青銅器が実は「柄付き銅鏡」であることを発見した人は霍巍であった。彼はその後、この西アジアに起源がある柄付き銅鏡が中国でたくさん発見される事実を確認し、これに関連する諸問題について考察した。<sup>36</sup>

私は、柄付き銅鏡の出土地を調べていて、面白い状況に気づいた。出土地を北から挙げると新疆省、四川省、雲南省、チベット自治区である。出土地はみなチベット高原の周縁に位置する。柄付き銅鏡の起源は言

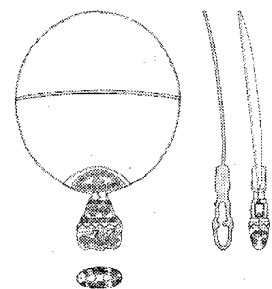


図27 東京国立博物館蔵柄付き銅鏡  
この銅鏡については霍巍2000参照

うまでもなく西アジアである。チベット高原に居住する遊牧民が東方へ伝えたと考えべきである。ところで柄付き銅鏡は、定住民が使用するのに便利な形式である。しかし、常に移動している遊牧民にとっては不便な形式である。そこで彼らは、柄を取り去って、円形鏡板の中央にヒモを通すための鈕を付ける形式を考案した。この形式を今「中国式銅鏡」と呼ぶ。最古の中国式銅鏡は青海省貴南県の齐家文化に属する墓葬から出土した<sup>37</sup>。(図28) この銅鏡は使用しているうちに鈕が破損したので、鏡板周縁にヒモを通すための孔を開けた。紀元前2000年に近い時代のものと考えられている。この出土地もやはりチベット高原の周縁にある。彼らは、西方によく見る印章の「つまみ」からヒントを得て、銅鏡に応用したのである。柄付き銅鏡と最古の中国式銅鏡これらがみなチベット高原の周縁で出土するのはけっして偶然ではない。かつて宋新潮が指摘したように<sup>38</sup>、安陽殷墟から出土した銅鏡<sup>39</sup>(図29)は、商王朝あるいは黄河中下流域文明と異なる系統に属する。直線だけの単純な紋様は、殷墟青銅器の紋様とは大きく異なり、齐家文化の銅鏡を真似たものであることは明らかである(あるいは交換購入したものかもしれない)。

中国東部地域の民族は定住民族でありながらも、柄付きではなく鈕式を愛好し、もっぱらこれを使用した。なぜであろう? 璧の例でも分かるように、彼らは「円」を完全な形、理想の形と考えて、この円形を偏愛した。ゆえに、もし柄を付けると「完全な円」が損なわれるのでこれを嫌った。だから定住民でありながらも、世界の他の地域の例に反して鈕式銅鏡を使用したのである。一方、チベット高原周縁の定住民族は、東部地域の民族と価値観が異なり、実用に便利な形式であるところの柄付き銅鏡をすなおに使用した。

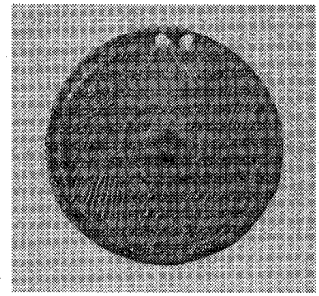


図28 最古の  
中国式銅鏡  
青海省貴南県齐家文化墓  
葬出土 直径9cm

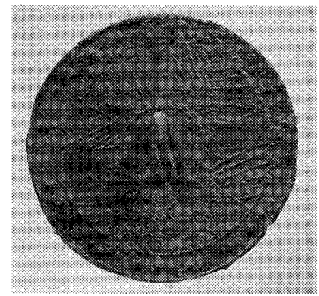


図29 殷墟5号墓  
出土銅鏡。  
直径11.7cm



## 2. 初期仏像

### 豊都出土仏像の仏像史上における重大な意義

中国人研究者は、仏像起源に関する研究も知識もない（そもそも関心がない？）ためか、豊都仏像の仏像史上における重大な意義についてまったく認識していない<sup>40</sup>。中国におけるもっとも古い時期の仏像はみな四川省から発見されている（図30）。その中でも、最近四川省豊都で発見された仏像<sup>41</sup>（図31）は、仏像の誕生時期を確定するための重要情報を提供する。仏像と共に発見された台座に“延光四年五月十日作”と記されてあった<sup>42</sup>（図32）。延光四年は西暦125年に当たる。豊都は重慶よりさらに湖北省寄りの地である。だから成都付近で発見された仏像の中には、これより古い時代のものもあってよい。

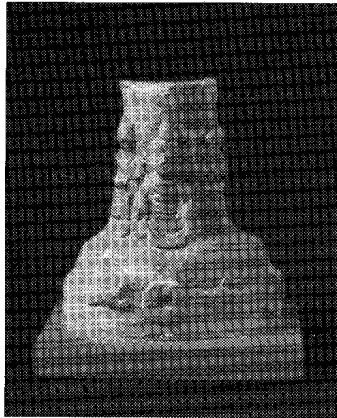
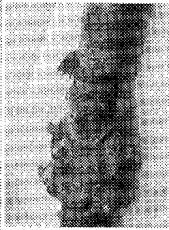
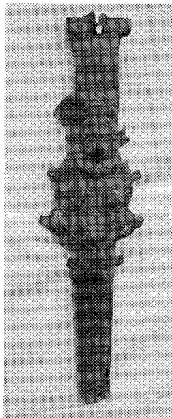


図30-1 四川省綿陽出土仏像(銅製)

図30-2 四川省彭山出土仏像(陶製)

図30-3 四川省楽山麻浩崖墓仏像(浮彫)

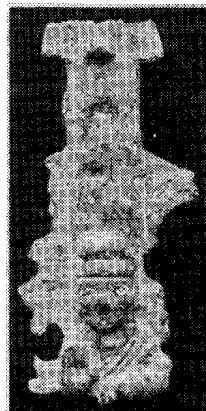


図31 製作年が分かる最古の仏像(豊都出土)

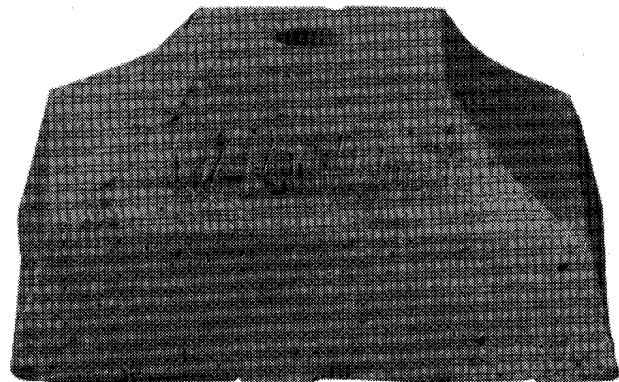


図32. 豊都出土台座の紀年銘

## 仏像誕生とクシャン王朝カニシュカ王

豊都の仏像が西暦125年に作られたのだから、遅くとも西暦100年ころには、ガンダーラとマトゥラーで仏像が誕生していたと考えなくてはならない。仏像はクシャン王朝カニシュカ王の時代に誕生したと考えられている。実際、カニシュカ王と仏教の密接な関係は『大唐西域記』など仏教方面のたくさんの文献に書かれている<sup>43</sup>。それらによれば、彼は仏教の強力な保護者であり、また布教に大きく貢献した。仏像がいつ、どこで誕生したかという問題は、まだ未解決とされている。誕生地については早くからガンダーラとインドのマトゥラーのどちらが早いかという論争が続いている。しかし私が調べた限りでは、両地でほとんど同時に仏像が出現したように見える。(図33)

出現時期についても諸説あり、早くから論争が続いている。カニシュカ王は仏教を強力に布教した人物であった。そして初期仏像の出土地がみなクシャン王朝の版図内にあることを考え合わせると、カニシュカ王の時代に仏像が誕生したのは間違いない。だから、カニシュカ王在位の実年代が分かれば、それがすなわち仏像誕生の時期ということになる。ところが、クシャン王朝自身の文字記録が非常に少ないだけでなく、その近隣地域のクシャン王朝に関する記録もほとんどない。

カニシュカ王はみずからの即位元年を紀元とするカニシュカ紀元を創始し



図33-1 クシャン王朝の初期仏像  
(舍利容器の蓋)



図33-2  
インド・マトゥラーの初期仏像

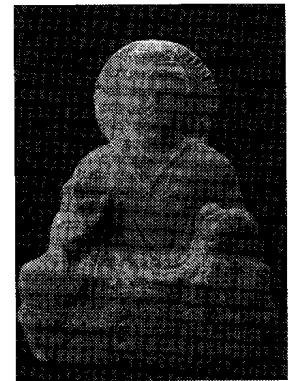


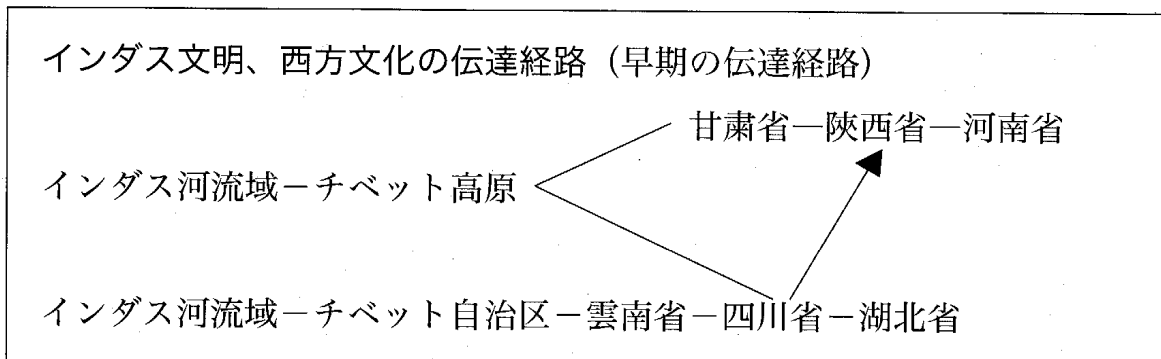
図33-3  
ガンダーラの初期仏像

た。ところがこのカニシュカ紀元が西暦何年に当たるのか、決め手となる証拠がない。ところが豊都で発見された仏像の台座に年号が記されていた。それによってこの仏像は西暦125年に作られたことが分かる。カニシュカ紀元の元年について諸説あるものの、以下の三説が有力視されている<sup>44</sup>。

1. 西暦78年。ヴァン・ロハイゼン。
2. 西暦128年。マーシャル等。
3. 西暦144年。ギルシュマン。

豊都仏像の年代を考慮すると、これら3説の中でロハイゼンの西暦78年説以外は成立しないことが明らかである。西暦128年説だと、カニシュカ王の前王ヴィマ・カドフィセス王の時代に仏像が誕生したことになる。しかしヴィマ・カドフィセス王と仏教の関係が密接であったことを示す資料は存在しないので、彼の時代に仏像が誕生した可能性は皆無と言ってよい。もっと遅い時代をとる説だといよいよ成立が困難になるのは言うまでもない。

西域のシルクロードが栄える前、西アジアや南アジア（古代インド）の文化は、下図に示す2つの経路で中国東部に伝わった。インダス印章あるいはアナトリア印章はチベット遊牧民が四川省の巴蜀民族に伝えた。銅鏡、インドの木星紀年法（あるいは占星術）、仏像などもこのルートで中国東部に伝わった。



注

1. 巴蜀印章に関する基本資料を列举する。四川省博物館1992。  
中国青銅器全集編輯委員会1994。劉瑛1983。四川省博物館1960。  
四川省文物考古研究所1998。高文、高成剛1998。什邡市文物保護管理所1997。
2. 什邡市文物保護管理所等1998。什邡市文物保護管理所1997。馮広宏、王家佑1996。  
鄭緒滔1994。
3. 榮経県文化館等1984。
4. 新都県文化館等1981。中国青銅器全集編輯委員会1994。四川省博物館1992。
5. 蒲江県文物管理所1985。
6. 吳怡1994。
7. 大邑県文化館等1985。
8. 中国青銅器全集編輯委員会1994。高文、高成剛1998。
9. 成都市文物考古研究所2002。顔勁松2002。
10. 大阪市立美術館1991。加藤慈雨楼1969。
11. 湖北省清江隔河岩考古隊1995。王善才1994。
12. 成家徹郎2005。
13. 中国青銅器全集編輯委員会1994。四川省博物館1992。劉瑛1983。
14. 中国青銅器全集編輯委員会1994。錢玉趾1986。
15. Raymond A. Bowman 1970。ピエール・ブリアン1996。佐藤圭四郎1989。  
伴康哉1981。高階美行1985。
16. 田中敏雄1981。塚本啓祥1976。E. Hultsch 1925。Richard Salomon 1998。  
Ahmad Hasan Dani 1963。D.C. Sircar 1965。
17. Georg Bühler 1904。David Diringer 1960。  
S.P. Gupta & K.S. Ramachandran 1979。
18. B. Henning 1950。伊藤義教1966。
19. 李学勤1990。
20. 李学勤1995。
21. 成家徹郎2001、2003。

22. 何元燾1990。
23. 常木晃1984。石田恵子1991。ドミニク・コロン1996。
24. 石田恵子1991。ドミニク・コロン1996。
25. 大村幸弘2004。
26. 大村正子1992。
27. The Middle Eastern Culture Center in Japan 2004、PLATE IV。
28. 近藤英夫1993。
29. 辛島昇等1980。S.R. ラオー1984。Fairservis 1992。
30. 辛島昇等1980、75ページ。
31. 新関欽哉1995。東京芸術大学等2002。V.M.Masson and V.I.Sarianidi 1972。
32. Bridget and Raymond Allchin 1988。
33. 吉田大輔1994。
34. 成家徹郎2004a、b。
35. 多傑才旦1995。
36. 霍巍2000、1993。
37. 青海省考古研究所等1994。青海省文物管理处考古隊1979。
38. 宋新潮1994。
39. 中国社会科学院考古研究所1984、1980。
40. 宿伯2004。
41. 徐光冀2003。『中国文物報』記者2002。何志国2002。
42. 徐光冀2003。『中国文物報』記者2002。何志国2002。
43. 小谷仲男1999、1996。高田修1976。逸見梅栄1928。小野玄妙1923。
44. 高田修1976、162ページ。

図出处

図1. 什邡市出土銅印。a、c：什邡市文物保護管理所提供。

b、d：四川省文物考古研究所1998

図2. 榮經県曾家溝出土銅印。榮經県文化館等1984

- 図3. 新都馬家公社出土方形銅印。四川省博物館1992
- 図4. 巴蜀武器上の図像。中国青銅器全集編輯委員会1994
- 図5. 新都馬家公社出土円形銅印。a：四川省博物館1992。  
b：新都県文物管理所等1981
- 図6. 成都市大邑県五龍公社出土石製印章。大邑県文化館1985
- 図7. 巴蜀円形銅印。a、c：中国青銅器全集編輯委員会1994。b：高文、高成剛1998
- 図8. 成都市商業街船棺出土方形銅印 (M1-31)。成都市文物考古研究所2002
- 図9. 成都市商業街船棺出土方形銅印 (M1-36)。成都市文物考古研究所2002
- 図10. 日本所蔵の巴蜀銅印。a：和泉市久保惣記念美術館提供。b：加藤慈雨楼1969
- 図11. 巴族陶印 (中国最古の実用印章 T9)。a：王善才2004。b：王善才1994
- 図12. 巴族陶印 (中国最古の実用印章 T10)。a：王善才2004。b：王善才1994
- 図13-1. 巴蜀表音文字 (武器銘文)。中国青銅器全集編輯委員会1994
- 図13-2. 巴蜀表音文字。a：中国青銅器全集編輯委員会1994。b：錢玉趾1988
- 図14. 冬筍壩出土漢字印章 (M50-14)。四川省博物館1960
- 図15. 冬筍壩出土漢字印章 (M50-15)。a：四川省博物館1960。b：劉瑛1983
- 図16. 冬筍壩出土銅印 (M50-39)。四川省博物館1960
- 図17. 冬筍壩出土銅印 (M50-17)。四川省博物館1960
- 図18. 巴蜀武器の図像文字 (字数最多の銘文)。李学勤1995
- 図19. 巴蜀青銅器と亞字形銘文。a：中国青銅器全集編輯委員会1994。b：劉瑛1983
- 図20. シリア出土アラム文字 (中近東文化センター (三鷹市) 所蔵複製。筆者撮影)
- 図21. ブラフミー文字 (Topra 石柱法勅)。a：樋口隆康1988。b：E.Hultsch 1925
- 図22. ライオン鈕スタンプ式印章 (象牙)。大村正子1992
- 図23. 榮経同心村出土四足獸鈕銅印。四川省文物考古研究所1998
- 図24. 什邡市出土四足獸鈕銅印。什邡市文物保護管理所提供
- 図25. カマン・カレホユック (トルコ) 出土円形印章 (石製)。  
日本アナトリア考古学研究所2004
- 図26. イングス印章。a：近藤英夫1993。b、c、e：近藤英夫、小磯学2000。  
d：町田甲一1979。f：Bridget and Raymond Allchin 1988。

g : Shikaripur Ranganatha Rao 1973

図27. 東京国立博物館蔵柄付き銅鏡。高浜秀1990

図28. 最古の中国式銅鏡（青海省齐家文化墓葬出土）。青海省考古研究所等1994

図29. 殷墟5号墓出土銅鏡。社会科学院考古研究所1985、カラー図版五五。

図30-1. 綿陽出土仏像。綿陽博物館提供。

図30-2. 彭山出土仏像。阮榮春、山田明爾等1993

図30-3. 樂山麻浩崖墓仏像（浮彫）。展示パネル。筆者撮影。

図31. 製作年が分かる最古の仏像（豊都出土）。『中国文物報』記者2002. 07. 05

図32. 豊都出土台座の紀年銘。徐光冀等2003

図33-1. クシャン王朝の初期仏像（舍利容器の蓋）。高田修1976

図33-2. インド・マトゥラーの初期仏像。VAN LOHUIZEN-DE LEEUW 1949

図33-3. ガンダーラの初期仏像。樋口隆康等1984

## 文献

丁長芬2005「雲南水富張灘搶救発掘戦国、西漢土坑墓群」『中国文物報』08. 10

成家徹郎2005「伝殷墟出土銅印の真偽問題」『季刊・修美』第91号 修美社

成家徹郎2004a『キトラ古墳高松塚の壁画の系譜』大東文化大学人文科学研究所

成家徹郎2004b「出土資料で解き明かすー屈原の誕生日」『人文科学』No. 9

大東文化大学人文科学研究所

王善才2004『清江考古掠影及出土文物図録』湖北省清江隔河岩考古隊等編

科学出版社

宿伯2004「四川地方の揺銭樹と長江中下流域出土器物に見られる仏像についてー

中国南方に現れた早期仏像に関する覚え書きー」（八木春生訳）

『中国国宝展』図録 朝日新聞社

The Middle Eastern Culture Center in Japan 2004, KAMAN-KALEHÖYÜK 13,

Anatolian Archaeological Studies Vol.X III, MITAKA

大村幸弘2004『アナトリア発掘記ーカマン・カレホユック遺跡の二十年ー』

日本放送協会

成家徹郎2003「三星堆青銅器の原料和巴族」(胡明明、徐天進 訳)

『殷商文明暨紀念三星堆遺址發現七十周年・國際學術研討會論文集』

社会科学文献出版社 北京

徐光冀等2003『永不逝落的文明—三峡文物搶救紀實—』山東画報出版社 濟南

『中国文物報』記者2002「重慶豐都槽房溝發現有明確紀年的東漢墓葬」

『中国文物報』2002.07.05

何志国2002。「豐都東漢紀年墓出土仏像的重要意義」『中国文物報』2002.05.03

東京芸術大学等2002『アフガニスタン悠久の歴史展』東京芸術大学、NHK

成都市文物考古研究所2002「成都市商業街船棺、独木棺墓葬發掘簡報」

『文物』2002年11期 北京

顔勁松2002「成都市商業街船棺、独木棺墓葬初析」『四川文物』2002年3期 成都

成家徹郎2001「三星堆青銅器と巴族」『月刊・しにか』2001年12月号

霍巍2000「從新出考古材料論我国西南的帶柄銅鏡問題」『四川文物』2000年2期

近藤英夫、小磯学2000「文明への旅立ち」『四大文明・インダス』NHK出版

中山誠二「インダス文明の動物世界—印章に刻まれた動物たち—」

『四大文明・インダス』NHK出版

小谷仲男1999『大月氏—中央アジアに謎の民族を尋ねて—』東方書店

四川省文物考古研究所1998『四川考古報告集』文物出版社 北京

什邡市文物保護管理所等1998「什邡市城関戦国秦漢墓葬發掘報告」

『四川考古報告集』文物出版社 北京

榮経巖道古城遺址博物館等1998「榮経県同心村巴蜀船棺葬發掘報告」

『四川考古報告集』文物出版社 北京

高文、高成剛1998『巴蜀銅印』上海書店 上海

Richard Salomon 1998, Indian Epigraphy, Oxford University Press

什邡市文物保護管理所1997『什邡館藏文物集粹』四川美術出版社 成都

小谷仲男1996『ガンダーラ美術とクシャン王朝』同朋舎出版 京都

ピエール・ブリアン1996『ペルシア帝国』(柴田都志子訳) 創元社 大阪

馮広宏、王家佑1996「什邡巴蜀印文考義」『四川文物』1996年3期



- ドミニク・コロシ1996『円筒印章—古代西アジアの生活と文明—』東京美術
- 新関欽哉1995『東西印章史』東京堂出版
- 湖北省清江隔河岩考古隊1995「湖北清江香炉石遺址的發掘」『文物』1995年9期
- 李学勤1995「符号最多的巴蜀矛」『文物』1995年8期
- 多傑才旦1995「關於絲路吐蕃道的交通路線問題」『傳統文化与現代化』1995年4期
- 吉田大輔1994「カマン・カレホユック出土の象形文字付ヒツタイト印章」  
『カマン・カレホユック』No.3 中近東文化センター 三鷹
- 王善才1994「長陽香炉石遺址揭示出古代巴人早期文化類型」『中国文物報』1994.12.18
- 吳怡1994「蒲江船棺墓与新都木椁墓出土印章的研究」『四川文物』1994年3期
- 中国青銅器全集編輯委員会1994『中国青銅器全集・巴蜀』（中国美術分類全集）  
文物出版社 北京
- 鄭緒滔1994「什邡船棺葬出土一枚“十方雄王”印章」『四川文物』1994年5期
- 青海省考古研究所等1994『青海文物』文物出版社 北京
- 宋新潮1994「殷墟文化の中に見られる北方民族の要素—  
殷墟銅鏡の起源を考察する—」  
殷墟甲骨文發現九十五年國際學術紀念活動1994 安陽
- 霍巍1993「チベット考古学の新収獲および古代四川チベット間の文化的つながり」  
『三星堆与巴蜀文化』巴蜀書社 成都
- 阮榮春、山田明爾等1993『仏教初伝南方之路』文物出版社 北京
- 近藤英夫1993「インダス文明とモエンジョダロ」  
『SAVE MOENJODARO モエンジョダロ 救おう！ 人類共通の文化遺産』  
ユネスコ・アジア文化センター
- Walter A. Fairservis 1992, The Harappan Civilization and Writing —  
A Model for the Decipherment of the Indus Script, Oxford & IBH Publishing,  
New Delhi
- 四川省博物館（発行年表記無し。1992年？）『巴蜀青銅器』  
成都出版社、澳門紫雲齋出版有限公司
- 大村正子1992「カマン・カレホユック出土ライオン形把手付きスタンプ形印章」

『カマン・カレホユック』No.1 中近東文化センター 三鷹

石田恵子1991『印章の世界』古代オリエント博物館

大阪市立美術館1991『一金の輝きと精緻の技—中国戦国時代の美術』

大阪市立美術館 大阪

李学勤1990「論新都出土的蜀国青銅器」『新出青銅器研究』文物出版社 北京

何元燾1990「“巴蜀印章”与古代商旅」『四川文物』1990年2期

佐藤圭四郎1989『古代インド』（世界の歴史6）河出文庫 河出書房

高浜秀1990「新たに購入した鏡形飾板について」『MUSEUM』1990年3月号

東京国立博物館

Bridget and Raymond Allchin 1988, The Rise of Civilization in India and Pakistan,

Cambridge U.P.

銭玉趾1986「古蜀地存在過併音文字」『四川文物』1988年6期

大邑県文化館等1985「四川大邑五龍戦国巴蜀墓葬」『文物』1985年5期

蒲江県文物管理所1985「蒲江県戦国土坑墓」『文物』1985年5期

高階美行1985「アラム語の世界」『アフロアジアの民族と文化』（民族の世界史11）

山川出版社

中国社会科学院考古研究所1985『殷虚青銅器』文物出版社 北京

榮経県文化館等1984「四川榮経曾家溝戦国墓群第一、二次発掘」『考古』1984年12期

常木晃1984「西アジア初期農耕遺跡より出土するスタンプ印章について」

『古代オリエント論集』（江上波夫喜寿記念）山川出版社

S.R. ラオー1984「インダス文字の解説」（佐藤任訳）『インダス文明の謎』

山喜房仏書林

樋口隆康等1984『パキスタン・ガンダーラ美術展』日本放送協会

劉瑛1983「巴蜀銅器紋飾図録」「巴蜀兵器及其紋飾符号」『文物資料叢刊』7

文物出版社 北京

新都県文物管理所等1981「四川新都出土方形銅印」『文物』1981年6期

伴康哉1981「シリア系文字の発展」『講座・言語』Vol.5「世界の文字」大修館書店

田中敏雄1981「インド系文字の発展」『講座・言語』Vol.5「世界の文字」大修館書店

- 辛島昇等1980『インダス文明—インド文化の源流をなすもの—』NHK
- 中国社会科学院考古研究所1980『殷虚婦好墓』文物出版社
- S.P. Gupta & K.S. Ramachandran ed. 1979, The Origin of Brahmi Script,  
D.K.Publications Delhi
- 青海省文物管理处考古队1979「青海省文物考古工作三十年」  
『文物考古工作三十年1949-1979』文物出版社 北京
- 町田甲一1979『インド国立博物館』（世界の博物館）講談社
- 宮治昭1979『シルクロード博物館』（世界の博物館）講談社
- 塚本啓祥1976『アショーカ王碑文』第三文明社レグルス文庫
- 高田修1976『仏像の起源』岩波書店
- Shikaripur Ranganatha Rao 1973, Lothal and The Indus Civilization,  
Asia Publishing House, Bombay
- V.M. Masson and V.I. Sarianidi 1972, CENTRAL ASIA —  
Turkmenia before the Achaemenides, Thames and Hudson 1972
- Raymond A. Bowman 1970, Aramaic Ritual Texts From Persepolis,  
The University of Chicago Press
- 加藤慈雨楼1969『平盒蔵古璽印選』（印譜作製1969）臨川書店複印発行1980 京都
- 伊藤義教1966「阿育王のアラム語碑文について」『オリエント』8-2  
日本オリエント学会
- D.C. Sircar 1965, Indian Epigraphy,  
Motilal Banarsidass Publishers P.L. Delhi1996, first edition 1965
- Ahmad Hasan Dani 1963, Indian Palaeography, Clarendon Press, Oxford,  
reprinted in New Delhi 1997
- David Diringer 1960, The Alphabet- A key to the history of Mankind,  
3rd edition Hutchinson, reprinted in New Delhi 1996
- 四川省博物館1960『四川船棺葬発掘報告』文物出版社
- B. Henning 1950, The Aramaic Inscription of Asoka found in Lampaka,  
Bulletin of the School of Oriental and African Studies,

- Vol. 13, 1949–1950, University of London, KRAUS REPRINT 1975
- J.E. VAN LOHUIZEN-DE LEEUW 1949, The "SCYTHIAN" Period,  
An approach to the history, art, epigraphy and palaeography of north Indian  
from the 1st century B.C. to the 3rd century A.D. Leiden, E.J.Brill  
逸見梅栄1928『印度仏教美術考・建築篇』甲子社書房
- E. Hultzsch 1925, CORPUS INSCRIPTIONUM INDICARUM, Vol.1,  
Inscriptions of ASOKA, Published by The Director General Archaeological  
Survey of India, New Delhi, reprinted 1991  
小野玄妙1923『健駄邏の仏教美術』丙午出版社
- Georg Bühler 1904, Indian Palaeography,  
Eastern Book House, Patna Bihar 1987, first printed 1904